

〔雲錦隨筆〕文政四年辛巳六月下旬、阿蘭陀國より駱駝牝牡を持渡る、同五年浪花難波新地に於て觀物とす、實に往昔より未だ渡らざる珍獸なり、一説に、亞辣比亞國の内黒加の産なりといふ、牝四歲牡五歲、高さ九尺、長さ二間、其頭羊に似て頂長く耳垂れ、脚に三の節ありて三に折れ、背に肉峯ありて瘤のごとし、其聲圓と曰ふ、其物喰ふこと一度に飽まで喰ひ、四五日食せず、其性寒を喜び熱を惡む、其糞烟直ぐに上つて狼烟の如し、其力よく重きを負ふこと千五百斤に至る、一日に百里行事最安し、又よく土中の水脈を知るといふ、本草綱目に云、駱駝は西北番の界にあり、野駝家駝あり、其色蒼褐、黃紫、數品あり、其性寒に耐へ熱を惡む、故に夏至に毛を退く、盡るに至つて毛を駝に作るべし、能く泉源水脈風候を知る、凡伏流して人の知らざる所を、駝泉脈を知て足を以て地に跑す、これを掘れば必ず水ありと云々、

〔橐駝考〕序

書云、珍奇獸不育于國、是概指無用異物、苟有所用、則夫夏翟大龜熊羆狐狸儼然列禹貢之典、聖人固不賤焉、國家盛德、遠夷時貢、厥方物、客歲窩蘭舶載駱駝牝牡各一隻、至于長崎、今茲來之、江戸、觀者爲群矣、蓋其性馴善、負重行遠、又能知水脈風候、乳汁可以充藥物、而其矢焚之、煙氣直上、可以爲烽火、有用如此、其孰賤之、故余抄出古人言及此者若干、則欲以示世、書賈某聞之、乃持橐駝考者一卷來請、余訂正、余乃校閱、又書所得於上標、更辨以關子圖及吉雄子所贈、余番篆題字、促之上木、是豈特爲一異獸哉、亦竊所以欲昭國家之德之致于天下後世也、

文政七年歲次甲申秋九月之日

撰于好問堂中北窓下北峯山崎美成

〔本草和名〕十五、獺、肝仁、語音、他未反、獺仁、語音、類、出、陶景、獺貌如狐、和名乎曾、

〔倭名類聚抄〕十八、獺兼名苑注云、獺名乎曾、水獸、恒居水中、食魚爲糧者也、唐韻云、獺、獺之別名也、